ディレクター日誌（活動・こどもたちの様子）

期日　　平成２８年７月１６日（土）～17 日（日）【１泊２日】
場所　　周防大島町土居周辺
参加者　小学校５・６年生１６名（男子８名、女子８名）

１日目　みかん園での仕事

期日　　平成 28 年７月 16 日（土）
場所　　島中小学校⇔みかん園
テーマ　体で働く　頭で働く　心で働く　～「職」から「食」へ仲間とともに～

【活動の様子】

昨年度からスタートした「仕事」へのアドベンチャー、“ジョブプログラム”。今年度も自然豊かな周防大島で開催された。

当日朝、県内各地から小学校５・６年生１６名が、集合場所である島中小学校に集まってきた。周防大島を初めて訪れた子もいれば、周防大島をよく知る地元の子も参加していた。プログラムが始まることへの期待と、メンバーやスタッフとの最初の出会いへの緊張とが混ざった表情をしている子が多い。

今回のプログラムで、子供たちは２つの班に分かれる。開会式を終えた後、それぞれの班で集まり、いよいよ活動が始まった。チャレンジの最初の一歩である。初めて顔を合わせた子供たちだが、円になって自己紹介をし、その場で決めたキャンプネーム(“自分のことをこう呼んでほしい”という名前)を呼び合うことで、次第に緊張もほどけていった。

インストラクターから２日間の仕事について話を聞いた。体を存分に使って働くこと。「職」から「食」を得るということ。子どもたちの表情に真剣さが増してきたように感じられた。

そして、いよいよ第１日目のジョブである、みかん園の仕事に向けて、子供たちは出発した。

島中小学校からみかん園まで徒歩で移動した。20 分ほど歩いて、現地に到着。まずは、みかん園の奥川さんに「仕事をさせてください。」とお願いした。

奥川さんから、山口県のオリジナル品種である“ゆめほっぺ”の木の摘果作業を依頼された。早速、摘果作業が始まる。実を大きくするために、はさみでみかんの実を摘んでいく仕事である。奥川さんから、このみかんは今後商品として全国に運ばれること、みかんを楽しみにしているお客さんが購入していくものであるということを聞く。みかんの木にはいくつもの小さな青い実がついている。近い場所に２つ以上の実がついている場合には、１つだけ実を残

し、後ははさみを入れていくのだが、どの実を切り落として良いか選ぶことが難しい。奥川さんからは子供たちに対して、「どの実を落とせば良いのか迷うだろう。しかし、その時には、いちいち私(奥川さん)に相談する必要はない。自分で考え、自分で判断するように。」との話をいただいた。

摘果作業は、木の負担を軽くすると言うことにもつながるそうだ。商品は東京の市場にも出ていく。その意識を持ち、作業が続く。

１つのグループは、３人組となって作業をしている。そうすることにより、摘果しなくてはならない場所の見逃しがなくなり、不安が軽くなるそうだ。子供たちは、それぞれが役割を意識しながら、一生懸命に仕事をしている。話をしながら取り組むことで、仲間との絆も生まれてきている。昼食をはさんで、午後からも仕事を続けた。

１つのグループは、摘果作業の後、みかん園にある石を運んだ。みかん園にあるたくさんの石が、草を刈るときの奥川さんの悩みの種でもあるそうだ。石を運び出す作業は子供たちの力によってあっという間に終わった。作業がしやすくなったと奥川さんはとても喜ばれていた。摘果作業、石を運ぶ作業と、たくさんの仕事を済ませた子どもたちは、奥川さんが喜ばれたことに対して、とてもうれしそうな表情を見せた。

仕事を終え、子供たちは奥川さんに野菜を分けていただけないか交渉した。みかん園に着いた時とは違い、決まった台詞ではなく、自分たちで考えた言葉でお願いをしていた。そして、たくさんの野菜をいただいた。トマト、きゅうり、じゃがいも玉ねぎなど新鮮な野菜がたっぷりだ。この野菜が夕食や朝食になる。

島中小に帰る途中、それぞれの班で、いただいた野菜を使った夕食のメニューを考えた。いろいろな夕食アイデアが子供たちから出され、仕事を終えた充実感も手伝ってか、子どもたちの仲間意識がさらに深まっているように感じられた。学校近くのお店で、野菜以外に必要な食材を購入した。

島中小に帰り、テントを設営した。テント設営が初めてという子供もいたが、８人で力を合わせて設営することができた。その後、近くの海に行って水浴びをした。しっかりと汗を流すことができた。そしていよいよ夕食作りの始まりである。もらった野菜に加え、追加で購入した材料を合わせてメニューが出来上がる。１つの班は、焼きそばやポテトサラダ、もう１つの班はカレーである。分担しながら夕食を作ることで、子供たちは、楽しみながら自身の役割に臨んでいた。

夕食の後、１日を振り返った。「最初は何をすればよいかがわからなかった」「奥川さんに声がかけられなかった」「働くということはどういうことなのか考えた」「いただいた材料で作った夕食がおいしかった」など、素直な感想が子供たちから伝えられた。短い時間の中でも、考えたことや感じたことははいっぱいあったようだ。

明日の予定をインストラクターが確認する。それぞれの班では、子どもたちの意見により最後に味噌汁を作って家族に食べてもらうことになった。明日への期待をふくらませ、テントに入った。

２日目　オイシーフーズでの仕事

期日	平成 28 年７月 17 日（日）
場所	島中小学校⇔オイシーフーズ
テーマ	体で働く　頭で働く　心で働く　～「職」から「食」へ仲間とともに～

【活動の様子】

起床してすぐに、テントを片付け、荷物を体育館に移動させた。朝方から雨が降り始めていたが、仲間と一緒にてきぱきと取り組んだ。

さらに、前日にいただいた野菜を使って、朝食を作った。朝食を済ませた後、班ごとに２日目の仕事場であるオイシーフーズに歩いて出かけた。現地に着くと、早速仕事のお願いである。昨日とは違い、班の仲間で力を合わせて声を掛け合うようになってきている。

２日目の仕事は、いりこの選別とラベル貼りである。オイシーフーズの新村さんから、今日子供たちが手がける商品は、今後お店に並ぶことを聞き、各自が仕事への責任感を強く感じていた。

グループごとに作業は始まった。ラベル貼りの仕事では、貼る位置を一つ一つ確認する。雑な貼り方では、お客さんが手に取ってくれなくなる。１枚１枚のラベルに、生産者の思いが込められている。いりこの選別も大変である。いりこ以外の小さな魚を取り除いていく。複数の子供たちが関わることで、取り除きのミスはなくなる。しかし、多くの作業時間を要する。だが、子供たちは、集中して作業を続けた。

作業が終わった後、食材を分けていただきたいと、新村さんにお願いした。新村さんから子どもたちに、大切ないりこをいただいた。

島中小に戻って、みんなで家族へ感謝の気持ちをこめて、味噌汁を作った。新村さんからいただいたいりこで出汁を取り、奥川さんからいただいた野菜を使って、『周防大島ジョブ味噌汁』を完成させた。作った味噌汁は、閉会式が終わってから、家族へ食べてもらうことに決まった。

閉会式では、この２日間で感じたことを子供たち１人ずつが全員の前で伝えた。働くことの大変さ、みかんやいりこが商品となっていくという過程にかかわり、役に立ったという喜び、奥川さんや新村さんをはじめ、２日間お世話になった方々への感謝の気持ちなど、１泊２日の短いプログラムではあったが、いろいろなことを子供たちは感じていた。これから、それぞれの家に帰った後、目の前にあるみかんやいりこを見た時に、きっと周防大島でのこの２日間を思い出すことだろう。

帰る時に、先ほど一生懸命作った味噌汁を家の人にプレゼントした。子供たちが頑張って働いて得た食材で作った世界に１つだけの味噌汁。家族の方々にとっても、もちろん子供たちにとっても、味噌汁の味は格別だったことだろう。子供たちの笑顔が２日間の体験を物語っているようだった。